

1 早期の出会いと個に合わせた発達支援を

みやぎ発達障害サポートネットは、自閉症・発達障害のある本人と家族が、人格の尊厳を保たれ安心して暮らせる社会づくりに貢献することを目的に活動している。

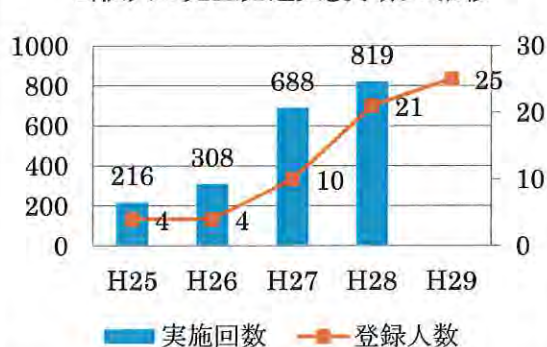
今日、発達障害と診断される数は増加傾向（H24 文科省調査：通常の学級に在籍する発達障害等の児童生徒は約 6.5%）にある。仙台市の発達障害児童生徒数の推移（H29.2 仙台市特別支援教育推進プラン中間案資料）も、平成 19 年と比較すると平成 28 年は約 1.8 倍となっている。併せて、当法人児童発達支援事業（多機能型）や相談事業から見える一人一人のニーズは多様化してきている。

このような状況から、早い時期から個の特性に合った発達支援を受けると、本人の不安が和らぎ、自己肯定感を培い、社会適応が改善されていくと考える。そこで乳幼児期の発達支援の場と支援内容の充実があげられる。

発達障害児者を取り巻く環境整備を

様々な報道機関等の情報から発達障害の認知に広がりは見られるものの、一人一人の障害特性に合った支援となると十分とはいえない。子どもたちは、自分に自信がなかったり自己肯定感が低かったりしても、プラスのかかわりが増えることで自分らしく表現する姿が見られる。そこで、保護者を支えながら共に育てていく視点と個の特性に合った支援ができる支援者を育てていく視点が必要であり、支援者の人材不足は大きな課題と捉えている。

当法人の児童発達支援事業の推移



2 発達支援には長期的な視点を

10年間の活動を経て、これまでかかわってきた子どもたちは高校生に成長している。その過程で不登校になった事例では、1対1で話すことで安心して登校につながっている。自分の困り感を十分に伝えられない苦手があっても、10年間のかかわりから信頼感が生まれている。また、自分らしく生きる力は継続的な活動から育まれている。このように信頼関係を軸とした長期的な視点と長期的な支援が必要と考える。

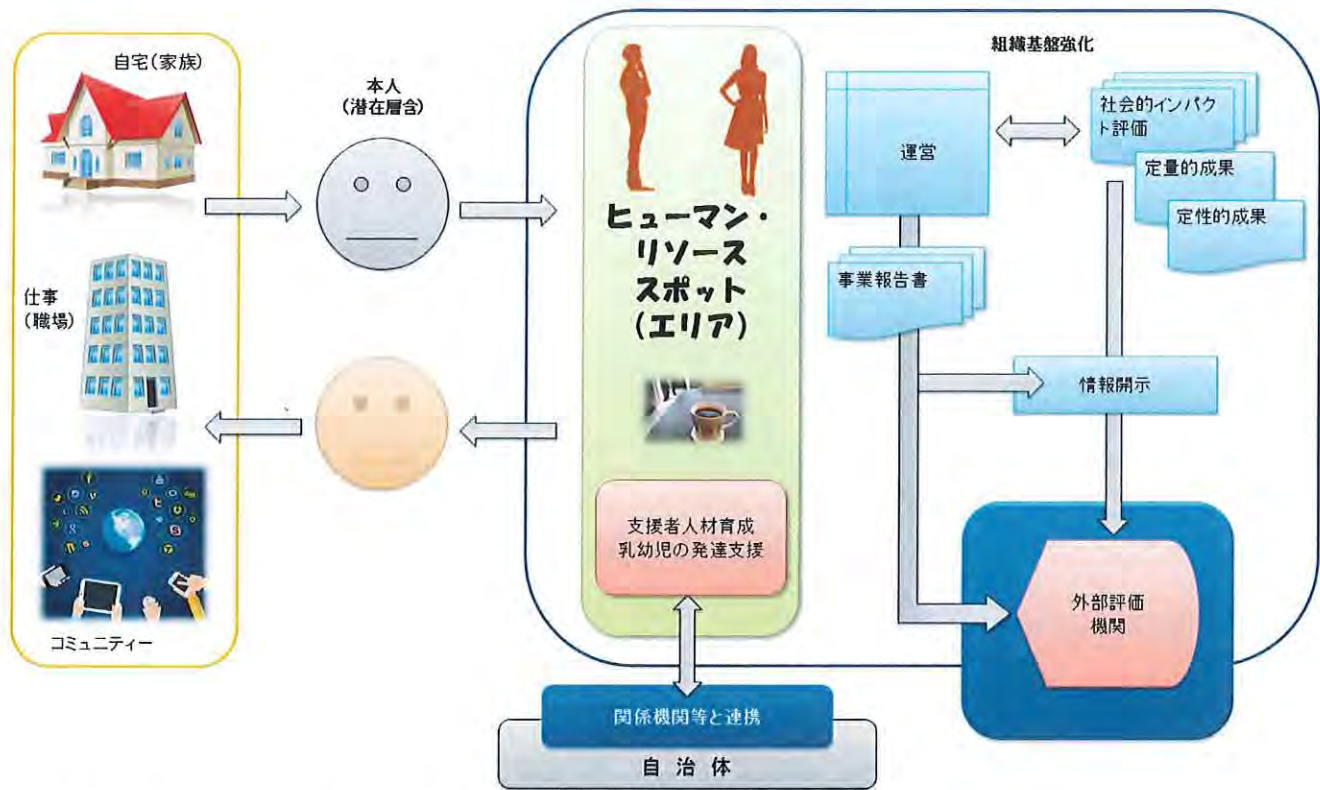
長期的な視点に立った発達支援を担う人材育成を

行政の施策等では、乳幼児健診などによる早期発見、早期の発達支援あるいは支援のための体制整備を取り上げており、発達障害に関わる各機関、団体等によるセミナーは年間を通して数多く開催されている。しかし、発達障害児が100人いれば100通りの個性があり、状況による支援はさらに細分化されるため、発達障害の特性を理解し、個に応じた支援を担う人材育成、特に乳幼児期の支援者育成は急務と捉える。多人数を対象にしたセミナー等に加え、少人数でも支援者が主体的に取り組み、スキルアップが図れる手だてを講じた育成が望まれる。

長期的な視点に立った成人期当事者支援を

当法人でかかわっている中・高校生は通常の学級に在籍している子どもが多く、自己理解、自己評価も進んでいる。就労による自立も可能なものと考えているが、福祉サービスを受ける障害者認定のはざまにいる。しかし、ピンチは突然にやってくるものである。そんな時、信頼関係の取れた自立を支える支援者と場所が必要になる。現在の自治体では、すぐに面談ができない、人事異動で担当者が替わるといった状況があり、不安を抱く当事者は右往左往することになる。そこで、成人期の学びの場としていつでも利用でき、信頼できる支援者が常駐しているといった条件を備えた場、「ヒューマン・リソーススポット（エリア）」（仮称）の設置が望まれる。このような場を利用することで、就労の定着化、納税できる人口増加、生活保護などの経費削減、孤独死や自死の縮小など社会的効果は大きいものと思われる。

高等支援学校や特別支援学校に在籍する子どもにとっても同じような場が必要となるだろう。現在は、本人発信でないと福祉サービスが受けられない窓口態勢の傾向が見られる。「ヒューマン・リソーススポット（エリア）」（仮称）は、働けるが本人のタイミングで話せないタイプ、生活全てに支援が必要なタイプ、できる・できないに波があるタイプなど個に合わせた状況に有効に働くものと考えられる。



3 事業化されたこと・されていないことへの活用を(前図参照)

大切な一人一人が活躍できる社会を願い、早期の発達支援の充実、継続した人材育成と「ヒューマン・リソーススポット(エリア)」(仮称)の立ち上げに活用する。中期計画3年～5年サイクルに合わせた継続的な手だて(場・時間・経費・人の投資)を講じ、信頼性(説明責任)と透明性をそなえた情報発信を実施する。

4 地域における真摯な活動、小規模団体等にも

自閉症・発達障害のある本人と家族支援を通しミッションへの理解と協力が得られたことは、ここ10年間の活動に寄せる信頼にある。自閉症・発達障害に関する問い合わせや相談が急増するだけでなく、共に共生社会に向けた貢献を進めたいとプロボノチームが立ち上がっている。また、次に記載した高校生の文は8年間という長期的な支援により、「自分を語る当事者」として自己表現できるまでの歩みが見られ、多くの反響が寄せられている。

これらの成果は、様々なツールを活用した情報開示によって得られている。事業や活動に価値判断が加わることは、組織として大きく成長することが期待でき、更なる波及効果も期待できるものとする。

自分は行動が遅い。時間の使い方が苦手だ。小さい頃から、自分はどのようにして他の人たちのようにできないのかと、ずっと悩んでいた。しかし、プリズムではそんな自分のペースに合わせてくれて、その中で先生や友達と話し、それが自分の短所なんだと分かってきた。それで落ち込むというよりは、なんとなく腑に落ちて、その上で出来る限り頑張ろうと思えた。

一方で、自分は時間を要する分、一つ一つのことを丁寧に処理することができるらしい。このことは、プリズムの中で、時間のかかる自分をむしろ肯定的に捉えてくれたからこそ、気付くことができたのだと思う。それで、なんとなく自分に自信が持てた。

プリズムに通い始めた頃は(その頃はまだ虹っ子だったが)、どうして自分がこのような場所に通っているのかもよく分からず、そんな中で多少面倒に思いながらも通っていた。だが、高校生になった今、改めて振り返ってみると、プリズムに通うのは月に数回で、生活の中心になってはいえないが、それでも、いやだからこそ、学校とは違う環境で、自分がどんな人間なのかが、通う度に少しずつ分かってきたような気がする。自分もプリズムに通い始めて8年くらい、その間には様々なことがあったが、プリズムという場所は、陰ながら自分を支えてくれていたようにも思える。

今は部活が忙しかったりして、グループのセッションに参加できないことも多いのだが、セッションの中で、グループのメンバーとは特別話すことはなくても、なんとなく安心できる。また、グループセッションを振り替えて個別でやったときには、自分の悩みや、将来のことについていろいろ相談できて、少しすっきりできる。プリズムはやはり今でも、自分のことを支えてくれているのだろう。(高2・Y児)